

就学前の「気になる」子の行動特徴と発達障害の関係

Relation between behavioral features
of “preschool children of concern” and developmental disorders

西村 智子

小泉 令三

Tomoko NISHIMURA

Reizo KOIZUMI

北九州市八幡東区役所

教職実践講座（教職大学院）

幼稚園・保育所の保育者が保育上「気になる」子の行動特徴を質問紙調査で検討した結果、先行研究による行動面に関する因子と同様な「自閉傾向」「感情のコントロール」「多動」の3因子に加え、「言葉の表現」と「ことば遊び」の2因子が新たに加わった。これらの5因子は、既存の行動スクリーニング質問紙である Strength and Difficulties Questionnaire(SDQ)と発達スクリーニング検査の乳幼児発達スケールとの関連から概ね発達障害と関連していた。特に「言葉の表現」「ことば遊び」の因子は学習障害の特徴と考えられ、就学前には診断が難しいと言われる学習障害の特徴を保育者が捉えていることが明らかになった。これらの結果をもとに、「気になる」子がいた場合に、その行動特徴の程度を確認するための質問紙（簡易版）を試作した。

キーワード 「気になる」子 行動特徴 学習障害 SDQ 幼児

問題と目的

1. 早期発見・早期支援

発達障害の子どもの早期発見・早期支援の必要性が指摘されており、欧米諸国では1990年前後より発達障害を乳幼児から発見していく試みが行われ成果を挙げている。たとえば、早期発見では、アメリカの幼児健診において乳幼児用自閉症チェックリスト改訂版(M-CHAT)などの発達スクリーニング検査が行われることになっている。また、早期支援としては、3歳以下であれば早期介入プログラムを子どもの家や子どもが慣れている場所で受けられ、個別化した家族サービス計画(IFSP=Individualized Family Service Plan)に取り入れられている。学齢期の支援としては、連邦政府により義務づけられたプログラム(IDEA=

Individuals with Disabilities Education Act)によって学習に障害があると診断された子どもに、適切な公共教育を無償で保障している。加えてアメリカの各州は特別な教育とその関連サービスを保証しており、必要な場合は言語療法士、作業療法士、学校心理士、ソーシャルワーカー、学校看護師、介助者等による援助も受けられる(U.S. Department of Health and Human Services, 2004)

しかし、日本では、従来実施されている乳幼児健診が発達障害の発見に十分活用されてこなかった(加藤, 2006)。それは、母子保健法に基づき乳幼児健診、1歳6ヶ月児健診、3歳児健診が実施されている乳幼児健診が、母子の心身の健康の保持・増進を目的としているが、どちらかといえば身体的発達に重点を置いたもので、発達障害の早

期発見には十分に機能していないためである。また、問診項目も各自治体が設定しており、発達障害のスクリーニングでは全国的に統一されたものは実施されていない。さらにいえば、1歳6ヶ月や3歳の時点で発達障害を診断できたとしてもその後の支援プログラムに明確なものがないのが現状である(林, 2006)。

そこで、文部科学省(2007)は「発達障害早期総合モデル事業」として、教育委員会が、医療、保健、福祉等の関係機関と連携し、発達障害の早期発見と発達障害のある幼児とその保護者に対する相談、指導、助言等の総合的な支援の在り方についての実践的な研究を行うことを平成19年度から開始したばかりである。

2. 早期発見のための取り組みと課題

早期発見のための先進的な取り組みとして5歳児健診が香川県東かがわ市、三木町、鳥取県大山町、米子市などの先進的な自治体で実施されている(小枝・下泉・林・前垣・山下, 2006)。これは、ADHDや高機能広汎性発達障害の幼児では3歳児健診のあと、保育所や幼稚園で集団生活をするようになってから急激にさまざまな問題行動が指摘されるようになり、3歳児健診を最終とする現行の乳幼児健診では充分対応できていない可能性があるためである(小枝, 2006)。そのため、5歳児健診は3歳までの健診と実施方法で違いがある。3歳児健診までは子どもと保護者が問診や診察の対象であるが、5歳児健診では、発達に関するアンケートを保護者と保育者に同じものをつけてもらったり、健診実施機関が幼稚園や保育所に出張して実施し保育者に子どもの様子を確認したりするなど子どもの集団での行動の問題を把握することで発達障害を発見できるよう工夫がなされている。つまり、従来の乳幼児健診より保健・医療機関と保育者との連携が重要になっていると考えられる。

また、5歳児健診が難しい場合には、5歳児発達相談の実施が検討されるが、発達相談の問題点は、悉皆の5歳児健診に比べ発達障害への「気づき」は約1/6に留まることである(小枝ら, 2006)。これは、悉皆の健診と違い、相談を受診する者は保護者自らが心配して受診する場合や保育所・幼稚園の保育者から指摘されて受診する場合など受診者が限られるためである。

3. 保育者の気づき—「気になる」子と発達障害の関連—

近年、保育所や幼稚園で「気になる」子が注目され、先行研究では、かなりの「気になる」子どもが在籍していることが指摘されている(平澤・藤原・山根, 2005; 本郷・澤江・鈴木・小泉・飯島, 2003; 岩立・竹田・吉田, 2001)。

これらの保育者の「気づき」と発達障害との関連を明らかにする必要がある(平澤ら, 2005)。それは、小学校以降の場で指摘される情動的にキレたり、学級崩壊を招いたりする問題行動の潜在的リスク要因は幼稚園、保育所においてリスクとして認識されることは少なく、保育者にとっての「気になる」存在及び行動としてとらえられている(岩立ら, 2001)からである。この中で、保育者がとらえた幼児の「気になる」子どもの行動特徴は、「多動」「乱暴」「自己中心的」といった行動面に関するものが多かったとされる。これらの行動特徴は、多動、衝動性、社会性の問題など発達障害の行動特徴と類似しており、発達障害との関連を明らかにする必要があると考えられる。

このような発達障害との関連を明らかにするために、発達障害のスクリーニングによって支援が必要とされた子どもと保育者の「気になる」子が一致するかどうかを検討することが考えられる。小枝ら(2006)は「軽度発達障害児に対する気づきと支援マニュアル」の中で、就学前の発達障害児を簡単に診断・鑑別できるような質問紙はないが、イギリスを中心としたヨーロッパ圏では、「子どもの強さと困難さアンケート」(Strength and Difficulties Questionnaire, 以下 SDQ) (Goodman, Ford, Simmons, Gatward & Meltzer, 2000) が広く使用されていると紹介されている。SDQは、「子どもの行動チェックリスト」(Child Behavior Checklist, 以下 CBCL) より項目数が少ないが(CBCL 113項目, SDQ 25項目)、CBCLとの相関も高く、不注意と多動の検出には有意にすぐれている。また、保護者や保育士が5分でチェックすることが可能であり、子育て相談に役立てるには有用なツールであるとされている。そのため、保育者の「気になる」子の行動特徴のうち、落ち着きがないや集団になじみにくいなど行動上の特徴とSDQの結果と一致しているかどうかをみることにより、保育者の気づきと発達障害が関連しているか検討できると思われる。また、発達の遅れについては、既存の発達検査との関連から検討できると思われる。

4. 本研究の目的

早期発見のための先進的な取り組みとしてあげられた5歳児健診は、早期発見のために従来の乳幼児健診を補完するものであるとともに、保健機関の行う5歳児健診と教育委員会が行う就学時健診を合同で実施することや、健診の結果を活かした就学支援を行うなど小学校へのスムーズな移行のためにも有用な方法であると思われる。しかし、全国的施策として定着するには時間がかかると思われ、その間にも支援を必要とする子ども達は成長している。そのため、5歳児健診の有無に関わらず保育者の発達障害児への「気づき」と支援を考えていく必要があると思われる。また、保育者が支援を必要とする子どもを支援していくために、どのように関係機関と連携しているのかを明らかにし、どのような支援が望ましいのかを検討する必要がある。

そこで、本研究では初めての集団生活の場である幼稚園・保育所の保育者が捉える「気になる」子が発達障害と関連しているのか、あるいは関連していないのかを明らかにし、発達障害の「気づき」のための「気になる」子の行動特徴を明らかにする。また、「気になる」視点が発達障害と関連があった場合、特定の「気になる」子の行動特徴の程度を確認するための尺度の作成を試みることを目的とする。

なお、従来の研究では、「気になる子ども」「ちょっと気になる子ども」などの表現が用いられているが、本研究では、「気になる」子を、障害児と認定されて在籍している幼児以外で、「保育者にとって保育が難しいと考えられている子どもで、保育をすすめる上で『気になる』点があったり特別の配慮を必要としている子ども」と定義した。また、「発達障害」を学習障害(LD)、注意欠陥/多動性障害(ADHD)、高機能広汎性発達障害(HFPDD)、軽度精神発達遅滞(MR)の4つと定義することとした。

方法

1. 調査対象

X市内の幼稚園・認可保育所 252ヶ所のうち協

表1 調査対象園児の内訳

群	人	(1)質問紙	(2)SDQ	(3)KIDS
A	77	○	×	×
B	14	○	○	×
C	185	○	○	○

注) ○ : 実施 × : 未実施 () は調査内容の番号

力の得られた61ヶ所(幼稚園24, 認可保育所37)と大学附属幼稚園の年中・年長児の担任142名に対して担任している園児2076名(全体は平均月齢 $M=67.6$ ヶ月 ($SD=7.0$)で48ヶ月~83ヶ月。内訳は年中 $M=61.4$ ヶ月 ($SD=3.6$)で48ヶ月~70ヶ月, 年長 $M=73.4$ ヶ月 ($SD=3.7$)で65ヶ月~83ヶ月)の内「気になる」子276名(全体は平均月齢 $M=67.6$ ヶ月 ($SD=6.9$)で55ヶ月から81ヶ月。内訳は年中 $M=61.7$ ヶ月 ($SD=3.7$)で55ヶ月~76ヶ月。内訳は, 年長 $M=73.3$ ヶ月 ($SD=3.8$)で65ヶ月~81ヶ月)について回答してもらった。

調査内容ごと(後述)の対象園児の内訳を表1に示した。

2. 調査内容

(1) 「気になる」子どもについての意識および対応に関する調査(以下、「気になる」子の質問紙)

本郷ら(2003)による「気になる」子の行動特徴で「対人的トラブル」「落ち着きのなさ」「状況への順応性の低さ」「その他」の4つに分類されている22項目に、今回新たに自閉症や学習障害など発達障害の項目を加えた。それをもとに幼稚園副園長1名との協議の結果、最終的な項目(54項目)を決定した。それを本郷ら(2003)と同様に、保育者が日常の子どもの姿を思い浮かべやすいように「保育者との関係」「他児との関係」「集団場面」「製作・課題・遊び」「生活全般・その他」の5つの場面に分けて配列した。そして、誕生日の近い同性の他児と比べ、その行動の見られた頻度を「少ない」から「多い」の5件法で保育者に尋ねた。

また、「気になる」子の対応において保育者が困る(困った)ことの有無(5項目・2件法)、情報収集の有無(11項目・2件法)、小学校への情報提供の有無(5項目・2件法)について尋ねた。さらに、保育者の発達相談事業への認知度(1項目・2件法)や保育者が受ける支援体制(3項目・2件法)等も尋ねた。

(2) SDQ

「軽度発達障害児に対する気づきと支援マニユ

表2 SDQとKIDSの結果の内訳(人)

SDQ \ KIDS	High Need	Some Need	Low Need	合計
遅れあり	47	24	24	95
遅れなし	38	24	28	90
合計	85	48	52	185

アル」(小枝ら, 2006)の中で紹介された, 適用年齢 4~16 歳, 25 項目で構成される行動スクリーニング質問紙である。[1]行為面, [2]多動性, [3]情緒面, [4]仲間関係, [5]向社会性の 5 つのサブスケールにあてはめて判断され, [1]~[4]の合計を Total Difficulties Score (以下 TDS) として支援の必要性を High Need, Some Need, Low Need で判断する。得点の基準は, 西村・小泉 (2010) に従った。

(3) 乳幼児発達スケール (KINDER INFANT DEVELOPMENT SCALE : KIDS) Type C (以下 KIDS)

スクリーニングタイプの発達検査で運動, 操作, 理解言語, 表出言語, 概念, 対子ども社会性, 対成人社会性, しつけの 8 領域で構成され, 各領域の発達年齢と総合発達年齢, 総合発達指数が算出される。生活年齢と総合発達年齢の差が 12 ヶ月以上ある者を発達の「遅れあり群」, 差が 12 ヶ月未満の者を「遅れなし群」とした。

3. 手続き

A 群の保育者には, 園から協力の合意が得られた (1) のみ郵送し, 記入後返送してもらった。B・C 群は, 保育者に通し番号をつけた在籍園児全体的な名簿 (番号リスト) を作成してもらい, 「気になる」子どもの番号には分かるように印をつけてもらった。保育者に対し B 群は (2) (1) の順, C 群は (2) (1) (3) の順で順次郵送し, 記入後その都度返送してもらった。B・C 群の (1) (2) (3) には, 最初に作成した名簿内の番号のみを記入してもらい, 調査の照合に用いた。

4. 調査実施期間

平成 19 年 10 月~平成 20 年 7 月

5. 分析方法

統計解析ソフト SPSS12.0j (エス・ピー・エス・エス株式会社) を用いた。

結果

1. 「気になる」子の行動特徴と SDQ と KIDS の関連

(1) SDQ と KIDS の結果の内訳

KIDS の結果から発達の遅れの有無別に SDQ の支援の必要性の程度によって対象園児を分類した (表 2)。

(2) 「気になる」子の質問紙の因子分析

対象園児 A 群~C 群について質問紙で尋ねた「気になる」子の行動特徴 54 項目について最尤

法, プロマックス回転で因子分析を実施した。

その結果, 「自閉傾向」「感情のコントロール」「多動」「言葉の表現」「ことば遊び」の 5 因子が抽出され, 各因子の信頼性係数 (α 係数) は, .87 から .92 であった (表 3)。自閉症や発達障害の幼児期の行動特徴として加えた項目は, 主に「自閉傾向」に分類され, 学習障害の行動特徴は, 「言葉の表現」と「ことば遊び」に分類された。本郷ら (2003) の項目は「感情のコントロール」と「多動」に分類された。

(3) 発達障害及び発達の遅れとの関係

各項目の「少ない」から「多い」までを 1 点から 5 点として得点化し, 因子ごとに得点の平均値を算出して因子得点とした (得点範囲 1.0~5.0)。

独立変数を SDQ (High/Some/Low) と KIDS (遅れあり/なし) とし, 従属変数を 5 つの因子得点としてそれぞれ投入して 2 要因分散分析を行った。用いたのは表 4 の各群ごとの平均値と SD である。その結果, 「自閉傾向」「言葉の表現」「ことば遊び」に交互作用 (順に $p < .005, 0.05, 0.05$) が見られ, SDQ が High Need であっても発達の遅れがなければ「自閉傾向」「言葉の表現」「ことば遊び」の因子得点は発達の遅れがある場合より低くなり, 保育者が「自閉傾向」「言葉の表現」「ことば遊び」を意識しにくい傾向が見られた (図 1)。

また, 「感情のコントロール」「多動」に SDQ の主効果 (どちらも $p < .001$), 「言葉の表現」「ことば遊び」に KIDS の主効果 (順に $p < .01, .05$) が見られた。「自閉傾向」「感情のコントロール」「多動」の 3 因子は発達障害と, また「言葉の表現」「ことば遊び」の 2 因子及び「自閉傾向」は, 発達の遅れと関連があると考えられる (表 5)。

2. 「気になる」子の行動特徴と「気になる」子への対応及び効果の関連

(1) 「気になる」子への対応と保護者への関わりについての因子分析

対象園児 A~C 群に「気になる」子の質問紙で尋ねた「気になる」子に対する対応 10 項目と保護者への関わり 7 項目について, それぞれ最尤法, プロマックス回転で因子分析を実施した。

その結果, 「気になる」子への対応では, 「見守り」と「介入」の 2 因子が抽出された。また, 保護者への関わりでは, 「親子の観察」と「保護者への働きかけ」の 2 因子が抽出された。

(2) 「気になる」子の行動特徴と対応方法と効果の関連

表3 「気になる」子質問紙の因子分析結果

	I	II	III	IV	V	共通性
因子I 自閉傾向 ($\alpha=.90$)						
19 他児への関心が乏しく、よくひとりで遊ぶ	0.79					0.41
28 騒がしい場面が苦手である	0.74		-0.25	-0.20		0.47
26 新しい場面ではなかなか慣れない	0.72					0.52
44 好きな玩具・場所・生き物に固執する	0.68	0.24				0.56
30 予定が急に変わると混乱する	0.67					0.53
36 決まった遊びをしたがる	0.66	0.22				0.55
31 園全体の集会など人が多く集まる場を嫌がる	0.57					0.39
35 ぶつぶつ独り言をいう	0.55					0.36
8 2つの動作を同時に行うことが苦手である	0.55	-0.25				0.54
5 視線が合いにくい	0.51			0.23		0.47
8 集団より一対一場面のほうが落ち着いていられる	0.51		0.22			0.37
4 ものなどを示し、具体的に指示しないと理解が難しい	0.47	-0.23	0.23			0.45
37 ごっこ遊びや見立て遊びが苦手である	0.47					0.36
34 水遊びに固執する	0.43					0.35
因子II 感情のコントロール ($\alpha=.92$)						
45 一度怒るとなかなかおさまらない		0.85				0.69
7 他児の行為に対して怒る		0.78				0.64
20 やりたいことを周りからとめられるとかんしゃくを起こす		0.78				0.70
2 一度主張し始めるとなかなか自分の考えを変えない		0.69				0.60
29 ゲームや競争で一番にならないと気がすまない		0.64				0.51
18 順番を譲れない		0.62	0.25			0.71
13 自分が行った行動を認めようとせず言い訳をする		0.61	0.25			0.59
16 ちょっとしたことでも意地悪されたと思う		0.61				0.40
6 「バカヤロー」などの言葉をいう		0.55	0.24			0.44
47 日によって調子の良いときと悪いときの波が激しい	0.29	0.48				0.39
因子III 多動 ($\alpha=.90$)						
22 じっと椅子に座ってられない			0.83			0.73
23 きょろきょろする	0.22		0.83			0.68
25 椅子に座っているとき他児に話しかける	-0.20		0.80			0.59
7 いけないと分かっているのについやってしまう		0.23	0.68			0.58
15 他児にちょっかいを出す	-0.28	0.21	0.67			0.56
3 保育者の「待って」などの指示に従えない			0.62			0.58
27 列から飛び出す			0.58			0.65
因子IV 言葉の表現 ($\alpha=.86$)						
53 ことばの言い間違いや聞き間違いがある				0.92		0.76
54 「スバゲッティ」を「バスゲッティ」や「エレベーター」を「エベレーター」などという				0.85		0.55
52 ものの名前を思い出すことが出来ず何でも「あれ」「これ」などの代名詞でいう				0.79		0.63
10 話しことばの遅れやオウム返しがある				0.63		0.55
21 自分の思いを適切な言葉で表現できない	0.34			0.42		0.47
因子V ことば遊び ($\alpha=.92$)						
42 「あ」のつくことばあつめなどができない					0.98	0.93
43 しりとりができない					0.95	0.87
41 なぞなぞに答えたりなぞなぞを考えて友達にだすことができない				0.23	0.60	0.66
因子寄与	10.42	9.48	9.44	8.00	6.01	43.34
因子間相関 II	0.35					
III	0.32	0.55				
IV	0.55	0.09	0.31			
V	0.43	-0.08	0.16	0.56		

(注) 因子負荷量は、絶対値が .20 以上のものを記載した。

表4 「気になる」子質問紙の結果

	High Need		Some Need		Low Need	
	遅れあり	遅れなし	遅れあり	遅れなし	遅れあり	遅れなし
自閉傾向	3.68	2.83	2.90	2.58	2.55	2.64
(SD)	0.63	0.90	0.65	1.02	0.86	0.68
感情のコントロール	3.62	3.72	2.43	2.66	2.33	2.66
(SD)	0.93	0.83	0.72	0.97	1.09	0.88
多動	4.06	3.92	2.99	3.11	3.10	3.22
(SD)	0.88	0.91	0.62	0.86	0.94	1.09
言葉の表現	3.37	2.50	3.29	2.32	2.43	2.49
(SD)	0.84	1.23	1.15	1.14	1.05	0.88
言葉遊び	3.90	2.47	3.89	2.53	3.24	2.98
(SD)	0.93	1.11	1.04	1.12	1.42	0.92

表5 「気になる」子質問紙の各因子の分散分析の結果

	主効果				交互作用	
	発達		行動			
自閉傾向	6.23	*	8.37	**	6.91	**
感情のコントロール	2.40		31.65	**	0.21	
多動	1.14		19.57	**	1.10	
言葉の表現	13.17	**	2.43		3.99	*
ことば遊び	23.09	**	0.53		3.59	*

* $p < .05$ ** $p < .01$

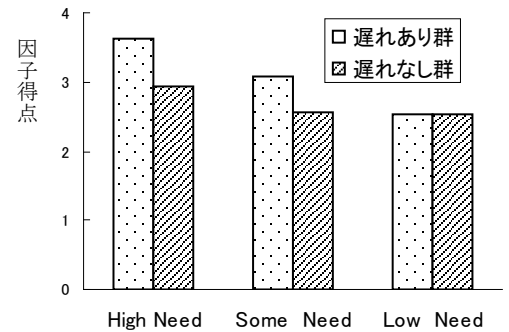


図1 「自閉傾向」の因子得点

「気になる」子の行動特徴と対応方法及び効果との関連を見るため重回帰分析を実施した。その結果、「気になる」子の行動特徴と対応方法では、「自閉傾向」から「見守り」と「保護者への働きかけ」、「多動」から「介入」と「親子の観察」、「ことば遊び」から「見守り」「親子の観察」「保護者への働きかけ」への有意な正のパスが見られた。また、「言葉の表現」から有意な負のパスが見られた。対応方法と対応の効果では、対応方法から対応の効果への有意なパスは見られず、対応の効果への関連が見られなかった。

3. 「気になる」子の行動特徴と「気になる」子への対応で困ることの関連

(1) 困る(困った)ことの有無

対象園児 A~C 群に「気になる」子の質問紙で尋ねた「気になる」子を支援するとき困ることがあると答えたのは 205 件、ないと答えたのは 66 件であった。困ることの内容は、「障害かどうか判断に迷う」が 117、「対応がわからない」が 113、

「保護者の理解が得られない」が 97 などであった。

(2) 保育者の困ることの有無と「気になる」子の行動特徴との関係

「気になる」子の質問紙で尋ねた対応で困ること 5 項目のそれぞれについて、その有無によって「気になる」子の行動特徴の 5 因子の因子得点が異なるかどうか t 検定で調べた(表 6)。「どう対応して良いかわからない」は、5 因子全てに有意差は見られなかった(自閉傾向 $t(197)=.927$, 感情のコントロール $t(198)=1.435$, 多動 $t(199)=.010$, 言葉の表現 $t(198)=1.004$, ことば遊び $t(198)=.850$)。「障害かどうか判断に迷う」では、感情のコントロールに有意差が見られた($t(179, 151)=2.224, p < .05$)。「障害かどうか判断に迷う」ことがある場合の因子得点が有意に高く、感情のコントロールの因子の内容である「一度怒るとなかなかおさまらない」や「他児に対して怒る」「やりたいことをとめられるとかんしゃくを起こす」などの特徴では、障害かどうかの判断が難しい

表6 「気になる」子質問紙の各因子と保育者の困ることの有無

	どう対応してよ いかわからな い		相談相手がい ない		障害かどうか 判断に迷う		保護者の理解 が得られない		「気になる」子に 手をとられて他 児に目が行き届 かない		クラス運営に支 障がある	
	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし
	(SD)	(SD)	(SD)	(SD)	(SD)	(SD)	(SD)	(SD)	(SD)	(SD)	(SD)	(SD)
自閉傾向	2.96	3.07	—	3.01	2.97	3.07	2.91	3.10	3.32	2.89	3.31	2.86
(SD)	(0.92)	(0.79)	(—)	(0.86)	(0.83)	(0.90)	(0.92)	(0.80)	(0.84)	(0.84)	(0.76)	(0.87)
感情のコントロール	3.12	3.33	—	3.22	3.08	3.40	3.15	3.28	3.66	3.03	3.59	3.03
(SD)	(1.09)	(0.95)	(—)	(1.03)	(0.99)	(1.05)	(1.07)	(0.99)	(0.90)	(1.02)	(0.90)	(1.04)
多動	3.58	3.58	—	3.59	3.56	3.61	3.64	3.54	3.83	3.49	3.94	3.41
(SD)	(1.07)	(0.97)	(—)	(1.03)	(1.02)	(1.03)	(0.99)	(1.07)	(0.91)	(1.06)	(0.92)	(1.03)
言葉の表現	2.91	2.75	—	2.84	2.94	2.70	2.76	2.88	2.85	2.83	2.97	2.77
(SD)	(1.10)	(1.10)	(—)	(1.10)	(1.15)	(1.01)	(1.11)	(1.07)	(1.02)	(1.13)	(1.09)	(1.10)
言葉遊び	2.99	3.15	—	3.06	3.08	3.05	3.00	3.10	3.08	3.05	3.16	3.02
(SD)	(1.27)	(1.28)	(—)	(1.27)	(1.29)	(1.26)	(1.37)	(1.17)	(1.28)	(1.27)	(1.28)	(1.27)

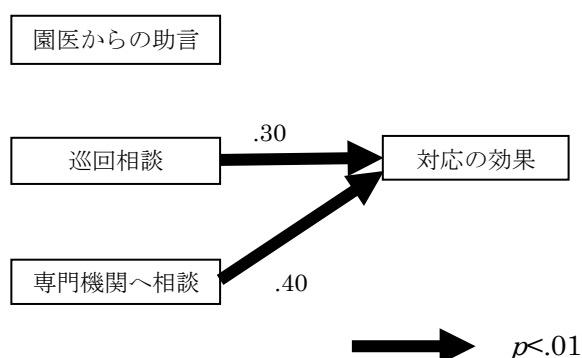


図2 「気になる」子の対応についての外部支援の効果

ことがうかがえた。「保護者の理解が得られない」では、5因子全てに有意差が見られなかった(自閉傾向 $t(197)=1.532$, 感情のコントロール $t(198)=.922$, 多動 $t(199)=.704$, 言葉の表現 $t(197)=.770$, ことば遊び $t(198)=.533$)。「気になる子に手をとられて他児に目が行き届かない」では、自閉傾向 ($t(198)=3.262$, $p<.01$), 感情のコントロール ($t(199)=4.136$, $p<.01$), 多動 ($t(200)=2.157$, $p<.05$)に有意差が見られ「気になる子に手をとられて他児に目が行き届かない」ことがある場合の因子得点が有意に高かった。「クラスの運営に支障がある」では、自閉傾向($t(198)=3.582$, $p<.01$), 感情のコントロール($t(199)=3.704$, $p<.01$), 多動 ($t(200)=3.563$, $p<.01$)に有意差が見られ、「クラスの運営に支障がある」ことがある場合の因子得点が有意に高かった。「自閉傾向」「感情のコントロ

ール」「多動」といった行動に問題があると「気になる」子に対して手をとられ、クラス運営にも支障が出ていることがうかがえる。

ここで、自閉傾向と学習障害の関係を検討するために、「気になる」子276名のうちKIDSの遅れなし群で、「気になる」子の行動特徴の因子得点が3点以上を「行動特徴あり」、3点未満を「行動特徴なし」としてクロス集計をおこなった(表7)。言葉の表現または、ことば遊びの行動特徴ありの者で、自閉傾向の行動特徴がなしの者は、21名であった。

4. 「気になる」子どもに関する情報収集

情報収集すると答えたのは258件、しないと答えたのは13件であった。情報収集する内容は、「気になる行動が家庭でも見られるか」が223件、ついで「どの保育場面で気になる行動が多いか」が189件、「子どもに対する養育者の態度」149件など「気になる」子どもや保護者等の現在の状況が中心であり、「入園までの生育歴」82件や「乳幼児健診の結果」56件など過去の状態に関する情報収集は少なかった。

5. 保育者の発達相談事業への認知度

対象園児A~C群の保育者に対し「気になる」子の質問紙で、X市で実施されている子育て相談事業「わいわい子育て相談」^{注)}をどのくらいの保育者が認知し、また利用を保護者に勧めたことがあるかを尋ねた。「わいわい子育て相談」を知って

注) 0歳から就学前の幼児で、言葉が遅い、なんとなく落ち着きがない、運動がうまくできないなどの心配について、医師・臨床心理士・作業療法士など複数の専門職で相談にあたる発達相談事業。

表7 自閉傾向と学習障害（言葉の発達）の関係の分類結果

	自閉傾向なし	自閉傾向あり	合計
言葉の表現, ことば遊びの行動特徴なし	23	4	27
言葉の表現または, ことば遊びの行動特徴あり	18	10	28
言葉の表現とことば遊びの両方の行動特徴あり	3	28	31
合計	44	42	86

表8 わいわい子育て相談の認知度の有無と保育者の経験年数の内訳（人）

	保育者の勤務年数					合計
	5年未満	5年以上 10年未満	10年以上 20年未満	20年以上 30年未満	30年以上	
知らない (標準化残差)	11 (1.67)	7 (0.46)	1 (-1.97)	1 (-1.06)	2 (1.03)	22
知っている (標準化残差)	23 (-0.83)	23 (-0.23)	28 (0.97)	13 (0.52)	3 (-0.51)	90
合計	34	30	29	14	5	112

表9 「気になる」子質問紙（簡易版）の因子得点

	High Need		Some Need		Low Need	
	遅れあり	遅れなし	遅れあり	遅れなし	遅れあり	遅れなし
自閉傾向 (SD)	3.43 0.92	2.68 0.98	3.06 0.67	2.46 1.06	2.41 1.14	2.65 0.76
感情のコントロール (SD)	3.60 1.13	3.77 1.01	2.43 1.05	3.77 1.01	2.28 1.24	2.63 0.97
多動 (SD)	4.16 0.96	3.94 1.00	3.20 0.74	3.94 1.00	3.26 1.05	3.32 1.22
言葉の表現 (SD)	3.20 0.96	2.46 1.27	3.09 1.40	2.46 1.27	2.29 1.16	2.46 0.90
言葉遊び (SD)	3.90 0.93	2.47 1.11	3.89 1.04	2.47 1.11	3.24 1.42	2.98 0.92

表10 「気になる」子質問紙（簡易版）の各因子の分散分析

	主効果		交互作用
	発達	行動	
自閉傾向	7.33 **	8.77 **	1.80
感情のコントロール	3.02 +	22.26 **	0.22
多動	0.00	14.29 **	0.63
言葉の表現	18.18 **	2.20	1.47
ことば遊び	33.78 **	0.18	2.77 +

注)発達=KIDSによる2群, 行動=SDQによる3群

+ $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$

いるものは91名(79.1%)、知らない者は22名(19.1%)であった(表8)。

「わいわい子育て相談」の認知度と保育者の勤務年数の χ^2 検定の結果、保育者の勤務年数に有意差($\chi^2(4)=11.256$)があり、「知らない」と答えた保育者は、勤務年数5年未満の者が多かった。

「わいわい子育て相談」を知っている者の中で、保護者へ利用を勧め紹介したことがある者は51名(44.3%)、ない者は42名(36.5%)であった。

6. 「気になる」子の行動特徴と支援体制

外部支援の有無と対応の効果の有無の関連について重回帰分析を行った結果、「専門機関からの巡回相談」と「専門機関へ相談に行く」から「対応の効果」への有意な正のパスが見られた。(図2)

7. 小学校への情報提供の有無

小学校へ「気になる」子どもについての情報提供をすると答えたのは259件、伝えないと答えたのは11件であった。伝える内容としては、「気になることについて」233件、「気になることにどう対応していたか」198件、「友達との関係」180件などであった。伝えない理由としては、「必要がない」7件、「保護者の理解が得られない」1件、「先入観をもたれたくない」1件であった。

8. 「気になる」子質問紙(簡易版)の作成

因子分析で抽出された39項目を各因子の項目を3項目ずつに絞った15項目の簡易版を作成し、その平均とSDを表9に示した。

39項目版と同様に発達障害と発達の遅れとの関係を検討するため、独立変数にSDQ(High/Some/Low)とKIDS(遅れあり/なし)を、従属変数に5つの因子得点を投入して2要因分散分析を行った。その結果、「自閉傾向」「感情のコントロール」「多動」にSDQの主効果($p<.01$)、「自閉傾向」「言葉の表現」「ことば遊び」にKIDSの主効果($p<.10, .05, .01$)が見られた(表10)。

考察

1. 「気になる」子の行動特徴と発達障害の関連

本研究で注目した「気になる」子の行動特徴は、発達障害とおおむね関連していることが明らかになった。まず、先行研究では、「気になる」子の特徴は多動や乱暴など行動面に関するものが多く報告されている(岩立ら, 2001)。今回も、「自閉傾向」「感情のコントロール」「多動」の行動面の3因子が抽出できた。これらの因子は、広汎性発達障害やADHDのための行動スクリーニング検査

であるSDQと関連していたことから、発達障害に関わっていると考えられる。

これら以外に、今回は新たに「言葉の表現」と「ことば遊び」の2因子が加わった。これらの因子は言葉の発達の遅れに関するものであるが、一般的な発達の遅れをみるKIDSと関連していたことから、知的な発達の遅れにも関わるものである。そして、注目すべきことはこれらの因子の項目は、幼児期には診断が難しいといわれている学習障害(小枝, 2006)の項目と重なりが多いということである。自閉傾向と学習障害の関係を分析した結果(表7)からは、オウム返しや適切な言葉で表現できないなどの言葉の問題は、自閉症児の言葉の困難さと重なる場合も多いが、保育者が自閉傾向を感じない場合で、なおかつ知的な遅れのない者であっても言葉の表現やことば遊びにつまずきを抱えた子どもを保育者が捉えていることがわかった。保育者への聞き取りでは、ことば遊びが苦手だった子どもで、就学後、学習障害と診断された事例があったことが1件報告されており、知的な遅れや自閉傾向がない場合でも、言葉のつまずきのある子どもを注意深く支援していくことが必要と思われる。

今回の質問紙で、従来「気になる」子の特徴とされている行動面の特徴の因子(「自閉傾向」「感情のコントロール」「多動」)以外に、言葉の発達に関する因子(「言葉の表現」「ことば遊び」)を設定することによって、より幅広く発達障害との関連を検討することができるようになった。

なお、「気になる」子質問紙(簡易版)は、実際に「気になる」子がいた場合に、その行動特徴がSDQやKIDSとの関係でどの程度のレベルにあるのかを確認する際に使用することができる。項目数を絞り込んであるので、簡便に実施できるという利点がある。

2. 保育者の気づきと関係者間の連携

(1) 保育者と保健機関

保育者と保健機関との連携の課題として、①乳幼児健診の結果等の情報の共有と、②保育者による社会資源としての保健機関の利用についての2つがあると考えられる。第1点目の保健機関との情報の共有の問題では、「気になる」子に関する情報収集が子どもや保護者の現在の状況を中心としており、「入園までの生育歴」や「乳幼児健診の結果」など過去の状況に関する情報収集は少なかったことである。

「気になる」子への対応で困ることとして「障害かどうか迷う」が1位であったが、子どもの現在の状態だけでは障害かどうかの判断は難しいと考えられる。そのため、出生時のトラブルの有無や定額、歩行開始の時期などの運動発達や初語の時期や内容、好きな遊びなどの精神発達、そして他者との関係などの情報を収集することが必要と思われる。このような情報は、子どもに対する認識を共有するために保護者から聞き取ることも重要であるが、保健機関の行う乳幼児健診の結果等を保健機関と保育者が共有し連携することで保育に活かすことができる。

第2点目の社会資源としての保健機関の利用に関する問題では、保育者も保護者からの相談に対して適切な社会資源を紹介する必要がある、社会資源を効率的に活用するための園内のシステムの構築が必要であると考えられる。

(2) 保育者と医療・療育機関

保育者と医療・療育機関との連携において重要な点は、医療・療育機関からのコンサルテーションの必要性である。

外部支援の有無と対応の効果の有無の関連から、外部からのコンサルテーションを受けることが対応の効果の認知に影響を与えていると考えられる。保育者に対する外部支援の内容としては、専門機関での相談の受付が最も多く、ついで専門機関からの巡回相談であった。外部支援と対応の効果の関連から、これらの2つの支援が対応の効果に関連していることがわかった。専門機関に行くのか来てもらうのかにかかわらず保育者は、療育の専門家から支援の方向性の助言を受けること、つまりコンサルテーションを受けることで保育を見直し、支援を実践していくことで効果的な対応ができると考えられる。

(3) 保育者と学校

保育者と学校との連携の課題は、情報の伝達、共有の方法であると考えられる。ほとんどの保育者は、「気になる」子について小学校へ情報を伝達すると回答している。伝達方法を質問紙の中では尋ねていないが、調査時の保育者への聞き取りでは、保幼小連絡会などにおいて口頭で伝えることがほとんどであった。今回は、引き継いだ内容を小学校側がどのように活用しているのかは未調査だが、片桐(2007)の小学校側からは、「幼稚園・保育所から情報が伝わってこない」、幼稚園・保育者側からは「情報を引き継いでも、小学校で活用

できていない」ということばが聞かれ、連携がうまくいっていないとの指摘があるが、それと同様のことが保育者から聞かれた。

そのため、口頭では、情報の伝達もれや、振り返って確認することが難しいため、どのような「気になる」行動があり、その行動にどのように対応すればうまくいったのかなどを記録し伝えることが必要ではないかと考える。先進的な取り組みを行っている滋賀県湖南市(旧甲西町)では、幼稚園から高校卒業まで統一された様式の指導計画を作成することになっている。このように移行支援として伝えるべき情報を整理し伝達していくシステムを構築する必要があると考えられる。

まとめ

本研究において、「気になる」子の行動特徴と発達障害との関連はおおむね関連していることが明らかになった。それに加え学習障害の特徴についても保育者の「気づき」があることが明らかになった。これらの結果をもとに、学習障害の特徴を加えた「気になる」子質問紙(簡易版)を作成した。今後の課題として、「気になる」子質問紙(簡易版)をスクリーニング・テストとして使用できるように、さらなる検討を加える必要がある。

引用文献

- Goodman R., Ford T., Simmons H., Gatward R., & Meltzer H. (2000). Using the Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ) to screen for child psychiatric disorders in community samples. *British Journal of Psychiatry*, 177, 534-539
- 林隆 (2006). 軽度発達障害児への気づきと対応システムーちょっと気になる子たちの幸せを願ってー軽度発達障害児への「気づき」と対応システムについての現状と課題. 小児保健研究, 66, 195-197.
- 平澤紀子・藤原義博・山根正夫 (2005). 保育所・園における「気になる・困っている行動」を示す子どもに関する調査研究ー障害群からみた該当児の実態と保育者の対応および受けている支援からー. 発達障害研究, 26, 256-267.
- 本郷一夫・澤江幸則・鈴木智子・小泉嘉子・飯島

- 典子 (2003). 保育所における「気になる」子どもの行動特徴と保育者の対応に関する調査研究, 発達障害研究, **25**, 50-61.
- 岩立京子・竹田小百合・吉田真弓 (2001). 保育者がとらえた幼児の気になる行動および保育者の対応について, 日本教育心理学会第43回総会発表論文集, 626.
- 片桐俊男 (2007). 教育行政の立場から見た就学前支援の現状と課題. LD研究, **16**, 298-305.
- 加藤紀子 (2006). 乳幼児健診をきっかけとした発達障害の早期発見支援活動とその評価に関する研究, 平成18年度厚生労働科学研究費補助金(子ども家庭総合研究事業)総括研究報告書
- 小枝達也 (2006). 軽度発達障害児への気づきと対応システムーちょっと気になる子たちの幸せを願ってー今後の展開. 小児保健研究, **66**, 207-209.
- 小枝達也・下泉秀夫・林隆・前垣義弘・山下裕史郎 (2006). 軽度発達障害児に対する気づきと支援マニュアル, 平成18年度厚生労働科学研究「軽度発達障害児の発見と対応システムおよびそのマニュアル開発に関する研究」
- 文部科学省 (2007). 平成19年度「発達障害早期総合モデル事業」,
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/19/06/07060609.htm
- 西村智子・小泉令三 (2010). 日本語版 Strengths and Difficulties Questionnaire(SDQ)の保育者評価. 福岡教育大学紀要, **59** (4), 103-109.
- U.S. Department of health and human services, National Institutes of Health, National Institutes of Mental Health (2004). *Autism Spectrum Disorders Pervasive Developmental Disorders*.

付記・謝辞

本研究は、第1著者が平成20年度に福岡教育大学大学院教育学研究に提出した修士論文の一部に加筆・修正を加えたものである。調査にご協力いただいた方々に心より感謝する。

なお、本論文は紀要論文(福岡教育大学紀要 第60号 第4分冊 179-189 2011年2月)を査読により修正し、新たに掲載されるものである。